

迷わずに、一歩 それぞれの介護

6 寄り添い続けるために

3月下旬、洛和会京都厚生学校（京都市山科区）で経管栄養や喀痰吸引の実技研修があった。参加した24人は、府内の特別養護老人ホームや介護老人保健施設の職員。一定の要件の下、介護職員が経管栄養や喀痰吸引を認められたのはこの1年。新たな技術を習得しようとして動き始めた人たちが集った。

「洛和グループホーム勸修II番館」の管理者を務める有馬祐季子さん（47）もそんな一人。職場を代表して語る。

ホームに帰りたい忘れられないケースがある。かつて勤務していた別

家庭的な場 最期の時まで

痰吸引や経管栄養

のグループホームで出会った人は、痰の吸引が必要になって病院に移ったものの「一晩だけいいからホームに帰りたい」と言い続けた。家族とも話し合った結果、訪問看護を利用することで「帰宅」が実現。願わじみのスタッフらが代わる代わる部屋を訪れる中、3日ほどして息を引き取った。

今度は、最期まで手を離さず見守り続けたい。いつやってくるか分からない「その日」のために、技術



訓練用の人形を使って痰の吸引の練習をする有馬さん。「利用者の方がグループホームで過ごし続ける助けになれば」と話す（京都市山科区・洛和会京都厚生学校）

て参加した。有馬さんの勤めるグループホームは、認知症と診断された人が、家庭的な雰囲気の中で生活できる。少人数で外食に出掛けたり、その日の気分で職員と散歩や買い物に行くこともでき、「自宅と変わらぬ暮らしを営もう」と願う人も多いという。

だが、家庭的な場所だが

介護職員ら研修懸命

介護職員による喀痰吸引等 昨年4月より、一定の研修を受けた介護職員などが不特定の人に対する痰の吸引や経管栄養といった医療行為を行えるようになった。都道府県知事に登録された機関が研修を実施、府内では「洛和会ヘルスケアシステム」（山科区）が初の登録機関。医療行為に関する内容は、介護福祉士養成施設のカリキュラムにすでに含まれており、2015年度以降は介護福祉士の資格を持つ人全員が医療行為を行えるよう国家試験の受験要件も変わる。

を身につけておきたい」とそんな思いで研修に参加した。

案になりましたか

2月から1月まで続いた研修は座学も含めると70時間以上。実技研修では、シナリオを読みながら人形を使って痰を取った。「苦しそうですね。痰をとりましょう」と声をかける。終了すると「案になりましたか」。人形に話しかけながら、有馬さんは「研修が終了すれば、実際の現場でこの言葉を掛けられる」と喜びをかみしめた。

かつてはグループホームの良きとしてコミュニケーションや寄り添いを挙げる人が多かった。「でも、今はそれだけでは足りない」と有馬さん。病院以外で亡くなる人が増え、介護職員にもフラスアルファの技術が求められる。「家庭的だからって、私たちがあとに関わるのは自然な流れ。最期までという覚悟はあります」

（太田敦子）

「おわり